

時代の流れと愛煙家の反応

近年喫煙者の数はやや減少傾向にあるが、それでも煙らせる煙魔の媚薬から逃れられない人は数知れない。健康問題と厳しい世間の目を考え、今後愛煙家はどのように変わっていくだろうか。幸い直近の調査では、喫煙者率は19.7%（男30.3%、女9.8%）まで下がり、この半世紀間で初めて20%を下回った。

タバコが喫煙者自身の健康を蝕むだけならまだしも、他人や世間へ影響が及ぶとなると見過ごすわけにはいかない。健康問題とは別に、今や火災発生最大の原因はタバコだから始末におえない。

ビルマ（現ミャンマー）では、昔から「セシ」と呼ばれる地元産のタバコが広く好まれ、旧日本兵の間でも愛煙され、戦後になってもセシを吸いたいと懐かしむ元日本兵の声がしきりだった。だが、このセシは見掛け上葉巻にそっくりで、持ち帰ってもいつも税関でもめるのが頭痛の種で、どう説明しても係官が納得してくれず困惑したものである。内戦下にあったカンボジアでは、ポル・ポト軍兵士が弾丸飛び交う戦いの最中でも、吸いたくなれば銃を小脇に置いて、両手に持ったタバコを忙しく代わる代わる吸うくらい彼らにとって、命を賭けた戦い以上にタバコが手放せないものになっていた。

日本より成人喫煙者の比率が低い米国では、一般的にインテリ層は喫煙しないとわれ、企業の管理職や教育関係者はほとんどタバコを吸わない。その一方、日本の教員には昔から愛煙家が多く、ある米国への教育視察団では愛煙メンバーのために、敢えて視察直前に校門外でたっぷり喫煙タイムを取ったことがある。それでも視察中にタバコを我慢出来なくなり、おそろおそろ喫煙の許しをお願いした瞬間、心身障害児担当教師から「幼い子どもたちが一所懸命障害から立ちあがろうと努力しているのに、あなた方はタバコも我慢出来ないのですか」と怒髪天を衝く雷に一同シュンとなったことがある。

かつて社会主義思想家・向坂逸郎氏が講演会で、「自分は煙突ではないので、タバコは吸わない」と語り聴衆の笑いを誘ったことがあったが、先進国では禁煙はインテリの矜持でもある。幸い生まれて此の方筆者も煙突とはまるで縁（煙）がない。